
恋の模様、銀の指輪

ゆゆき @RW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の模様、銀の指輪

【Z-コード】

Z9368D

【作者名】

ゆゆき@RW

【あらすじ】

好きな彼から指輪を貰つた私。その指輪をはめた時から彼しか考えられなくなつて……

第1話・恋の模様、銀の指輪（前書き）

この回はやつでもありますんが、次回からH口くなつてこさまやの
でじ注意を

第1話・恋の模様、銀の指輪

「人が別れる場所、少年が指輪を拾った場所での前日の夜の話。
「全く、何よこの指輪。愛する人と感情をリンク出来る、両思いならば外れないとか嘘ばっかじゃない。本当ならば私とあの人の指輪が外れる訳がないわ。全く、もしかしたらと思つて少しでも期待した私が馬鹿だつたわ。もうこんなもの見たくも無い、どつかに行つてしまえ」

そして指輪は女に投げられた。

太陽が沈みかけ、赤く染まつた町で、まだ残つている冬の冷たい風を受けながら私は考える。冷たい風が吹いているが寒くは無く、もう必要の無いはずの手袋をつけて私は手に汗をかいしている。

「どうしたの？」

学校が終わり、一緒に下校している幼馴染が私に聞く。ちょうど、どうやって話を切り出そうかと悩んでいたその時だつた。流石幼馴染、私のこの心の変化も読んでくれたのか。

「実はさ、見て欲しいものがあるんだ」

私はそういうながら制服の胸のポケットに入れた指輪を彼女に差し出す。指輪には何の宝石も無く、ただの鉄の輪に見えた。だがよく見てみると表面に線が沢山ひいてあり、美しい模様となつていて、重さはあまり無く、どこにでもありそうな洒落たアクセサリーだつた。

「この指輪がどうしたの？」

受け取つた指輪を早速指にはめながら彼女は聞く。全くその様な物に興味の無い私が持つてゐるのを不思議に思つたのだろう。

「今朝、学校に来るときに拾つたんだ」

今はその事を物凄く後悔している。ああ、何故拾つたのだろうか。

「学校に来るときに光る物が見えて、綺麗だなと思つて拾つたんだよ。それでどうせ安モンだらうと貰つておこうと思つて拾つておいた」

左手の手袋を外して、彼女とお揃いの指輪を見せながら私は続けた。

「けど途中で申し訳なくなつて、指輪を外して近くにおいて行こうと思つたら外れなくて。付けたときはそつきつくなかったんだけどね」

その時、彼女が自分が指にはめた指輪を外そうと思い、苦戦する。やはり指輪は外れない。どうやら彼女も同じようだ。

「何でそんな指輪を私に渡すのよ」

怒りながら彼女は言つた。怒つて熱くなるようなタイプではないが、根に持つてブツブツ言つようなタイプである。

「渡したが、まだつけてみるとは言つてないんだけどな」

問題は外れない指輪をどうするか、なのだ。朝拾つて今まで何も案が思いつかない。力に任せても取れないし、糸を通しても取れない。ならどうすればいいのだろうか？

「それで、どうするのよこれ？貰つちゃうよ？」

流石幼馴染。私の言いたいことを見事に解つてくれる。

「そうしてくれ。もしも外れても返さなくとも構わないよ」

そうして何時もの場所で私と彼女は別れて、お互に自身の帰路を歩いた。

幼馴染の彼と別れた帰り道、彼女は指にはまつている指輪を見ながら呟いた

「全く、酷いわね…外れない指輪と知つている指輪なんて渡して」
だがそう呟いている彼女は怒つてなどいなく、笑みが浮かんでいた。

でも、どうしてこの指輪を始めた時にはそつきつくなかったのに

抜けないのだろう? 長い間外さなかつた指輪が外れない、という訳ではなく付けて直ぐに外そうとしても外れない。指の時間だけ早くなっているのだろうか。ありえない話だが、指輪が抜けないのもありえない話なので考えてみる。だが指は変わらないし、また爪も伸びていない。……などとその様な事を考えたが、本気で考えてなどいない。私が最も気にしているのはこのような疑問や不思議では無く、ただ一つの事実、この指輪が彼とのお揃いであることだつた。

そう思うと嬉しくてたまらなかつた。今までずっと幼馴染だつた彼に、想いを告げようにも彼は私の事を幼馴染としか思っていないく、冗談かと思われて笑い飛ばされるだろう。だが、いつかは伝えたいと思つていてその機会をうかがつてはいる。いつかは、いつかは彼にこの想いを伝えたい…

家につく頃にはもう、夕食の用意ができていた。いつも速度で歩いたつもりながら、そうやら考え事に夢中になってしまいいつも速度よりも遅く歩いてしまつたようだ。家に帰り夕食を食べる。何時もと何の変わりは無い。ただ、気持ちが少し浮いていると思う。というのは、私はいつもと変わらない夕食をとるうと思い、何時もと変わらない夕食をとつていたのだが母に指摘されたのだ。

「どうしたの? 何かいい事でもあつたの?」

だが母に言つてからかわれるのも癪なので特に何もないと伝え、話題を変える。母も私が何も言わないとわかり、変わつた話題に乗る。だが自然と話は戻る。というのは、何故か私の出す話題はどれも彼に関係する話題だからだ。サツカーラーが好きだという話題を出したら自然と彼の話題になり、今話題の歌手が嫌いだという話題を出したらこれもまた彼の話題になつた。それも母が変えているのは無く、私が変えている。指輪を貰い、気分が高まつてはいるからだろうか、彼の事を思つてばかりで私も自然と彼の話題を出していく。一休私はどうしているのだろう? 夕食を終えて、逃げる様に風呂を浴びる事にする。

彼は私の事をどう思つているのだろう？湯に浸りながら指輪を見ていたら、私は思った。きっとただの幼馴染としか思っていないだろうな、と思つてまた違うことを考える。

もしも私が幼馴染で無かつたら彼の彼女になれたかな？もしも的话。彼にとつて幼馴染の私から幼馴染をとつたら、彼の何になるのだろうか？彼女になればいいな、と思うがまた一つの疑問が浮かぶ。

幼馴染で無い私を彼は彼女にしてくれるのだろうか？彼以外の男性は苦手であまり話さず、同性ともあまり話さない内気な私。彼と話すことができるのは幼馴染だからなのだろう。幼馴染では無い私は今のように親しくなるのだろうか？また、私よりも綺麗な子がいる中で私を彼女にしてくれるのだろうか？

顔は童顔とよく言われ、胸のふくらみは他の人と比べると小さい。また、身長は彼の肩程度しか無い。ただ、体のどこかに自慢があるとしたらこの長い髪だろうか。幼い頃から伸ばし続け、大事にしてきた髪だけが自慢の典型的な日本少女である。こんな私を彼は好きになつてくれるのだろうか？そんな事は自身ではなくいつも会つている彼に、いつも登校している彼に聞けばいい。だがそんな事は出来ずに悩み続ける。もしも期待した返事が来なかつたらお互いに気まずくなり、今の関係よりも悪くなつてしまつ。それは避けたい。彼に伝えずに想つてこのまま一緒に居たい。だが期待した返事が返つてきても、私はどうすればいいのか解らないだろう。だが今よりも彼との距離が近くなるだろう。そうしたらやつぱりやるのかな？

その時、一気に恥ずかくなり、長湯でのぼせて赤くなつていた頬は恥ずかしさで更に赤くなつた。やる、といつたら当然アレしかな。そして光る指輪を見て、彼に見られている様に感じ更に恥ずかしくなり、風呂から上がつた。

一体私はどうしたのだろうか？指輪を付けたあの時から、こう彼

を強く意識し始めた。彼から貰つた指輪の効果なのだろうか。指輪を見るたびに彼を意識する。私はその指輪を隠すようにして、手を枕の下に入れた。体が熱い。明日も早起きして学校に行かなければならぬのに、全く寝付けない。彼は一体どうしているのだろう？彼も指輪で私の事を意識して寝付けない、だなんて思つたがそんな事は万が一にも無いだろう。私は彼の幼馴染なのだから。

第1話・恋の模様、銀の指輪（後書き）

春工ロス2008投稿作品。Hロくしょりと思いましたが全然な
つていません。なので次回からそれっぽく。

指輪はヒビ模様～Last Part（前書き）

第一話、最終話投稿

指輪はヒビ 模様 ↴ Last Part

寝付けなかつたが、気づいたら寝ていた。寝た気が全くしないが、もう朝の目覚まし時計がなつていて。そして起きた私は顔を洗うよりも、ベットから起き上がるよりも前に指にある彼から貰つた指輪を確認した。だが指輪はそこには無かつた。

枕元に割れた指輪があつた。

まるでガラス細工を落とた様に指輪が割れていた。

もしかしたらこの指輪には何かの魔法があつたのかも知れない、と私は思った。彼の事を意識させる魔法でもあつたのかも知れない。指から外れない魔法でもあつたのかも知れない。

何故割れたのか。きっと彼を思う私の気持ちが指輪を壊したのだろう。それとも指輪の魔法　彼を思う魔法　が切れて指輪は割れたのだろうか。

握った手の中にある指輪は冷たく、開けてみると指輪に書いてあった模様も消えていた。

全て想像の話。

魔法の指輪なんてものは無く、彼の事を意識しているのはいつも事でそれを指輪のせいにしただけなのではないだろうか。外れない指輪も、私が無理をしてはめたのだろう。

割れたのもきっと安物の指輪だつたからかもしれないし、模様が消えたのも安物だからだろう。鉄に見えるが実はメッキで上手く加工されているだけなのかもしれない。

これらも全て想像の話。

メッキで加工されているかどうかは鉄やすりで削つてみれば簡単にわかるだろう。だが魔法については確かめようが無く、ただ私が有り得ないと思いつつも期待しているだけである。

なら、と思い私は指輪を窓から遠くに投げた。小さく鉄の音がした。確かにメッキがはがれて残念な思いをするよりも、少しの期待を持ちたかった。

投げられた指輪は一組あった。両方とも、一人が拾つた時には無かつた模様のようなヒビが入っていた。

本当に指輪に魔法があるのかどうかだなんてわかりはしない。ただ、人がそう信じ思えば魔法の指輪になるのである。
また別のカップルが指輪を拾つたのは別の話。

指輪はついに模様～Last Part（後書き）

ヒロシーン…………？

全くありませんね困った困った
すいませんすいませんすいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368d/>

恋の模様、銀の指輪

2010年10月8日15時31分発行